第４部　演奏力向上のために

この第４部では、金管楽器の設計者として長年に渡り世界中の一流プレーヤーとの意見交換をもとにした、演奏力向上のノウハウをご紹介します。初心者の方から上級者の方まで、楽器メーカーならではの技術的な豆知識も取り入れつつ説明したいと思います。

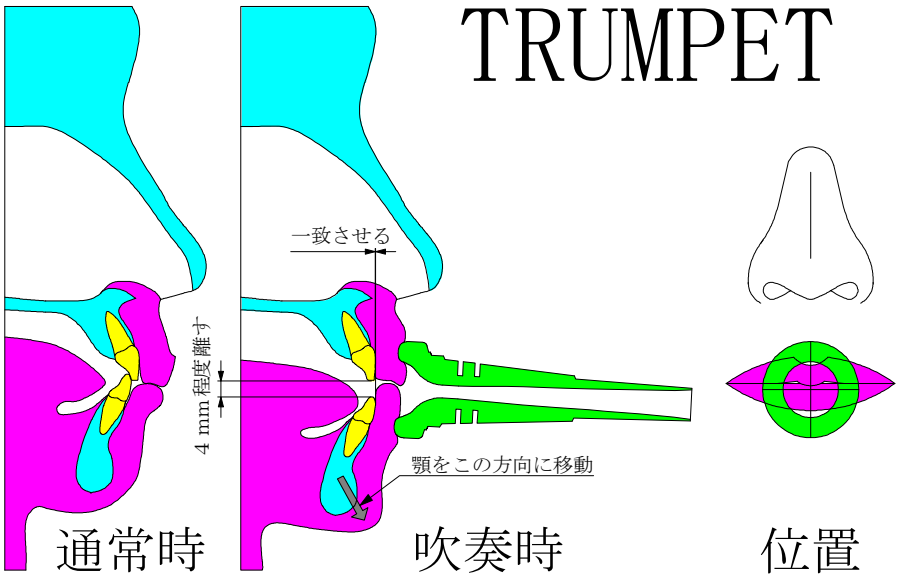
Ⅰ　アンブシュアとマウスピースの位置

初めに、彼らプロフェッショナルプレーヤーの標準的なアンブシュア、そしてマウスピースのセッティング例を下図と p.27 の図を用いて説明します。(＊数値はあくまでもイメージであり、絶対的な数値ではありません。また、音域に依って変化する場合もあります。)

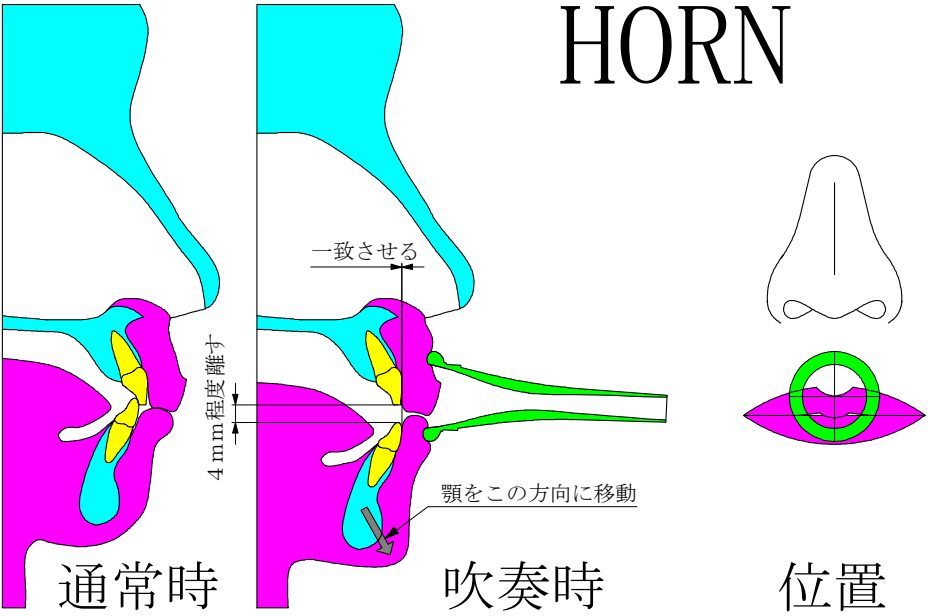
彼らのほぼ全てに共通して言えるのが、アンブシュアをセットする際、**上の歯と下の歯の表面を一致させている**ということです。この時、上の歯先と下の歯先の間はトランペットとホルンで 4mm 程度、トロンボーンで 6mm 程度離れています。**上唇と下唇とがぴったりとはくっついていない**ということも重要なポイントです。これを理解し、この僅かな隙間をしっかりと意識してアンブシュアをセットすることで適正なアパチュア(aperture:息の出る穴)が得られます。

次に、**マウスピースのセッティング位置が楽器ごと上下方向に異なる**ということに注目です。トランペット奏者の場合、マウスピースは唇に対してやや下寄りにセッティングし、トロンボーン奏者はやや上寄りにセッティングします。またホルン奏者は、下唇の赤い部分にマウスピースのリムを乗せるような感覚でセッティングするのです。このセッティングを正しくすることで、その楽器に合った効率の良い唇の振動が可能になるでしょう。また、主に振動するのは上唇で、下唇はその振動を支える壁の役目を担っています。

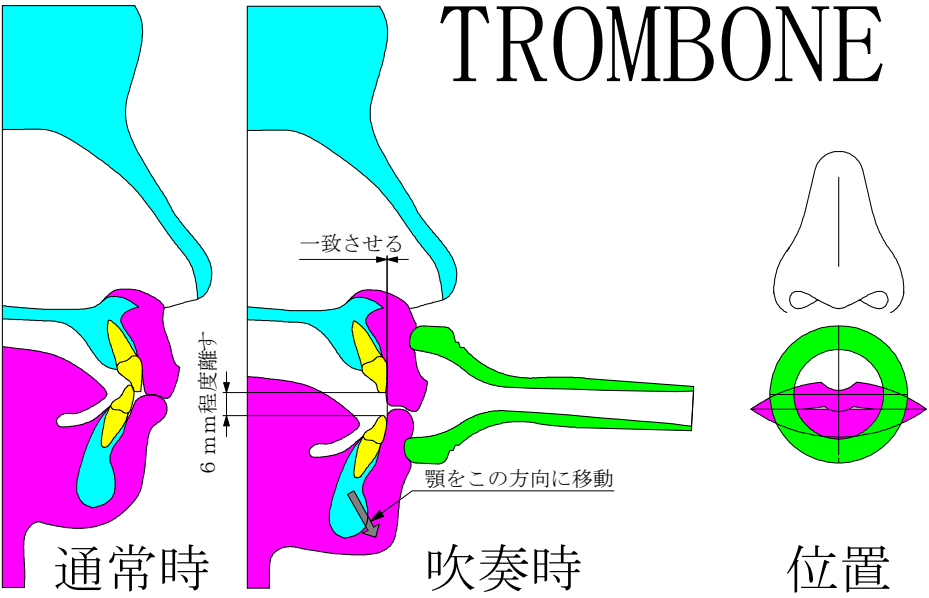
次に、金管楽器の演奏をする際に舌の位置を調節することで、息のスピードや方向を変化させて音域を吹き分ける、いわゆるシラブルの使い方も非常に重要です。シラブルは簡単に言えば、口笛を吹く時の舌や息の使い方のようなものなのですが、**アンブシュアについてあれこれ悩むより、シラブルを使いこなす方が上達への近道です**。また、口笛を吹く時の呼吸の仕方や、肺を支える際の筋肉の使い方は金管楽器を吹奏する状態と同じですから、参考になります。



HORN



TROMBONE



Ⅱ　音の鳴る原理

金管楽器を吹いたら音が出るのはもちろん、吸っても音は出ます。つまりこれは、「唇が振動すれば管楽器から音が発生する」ということを意味しているのです。楽器は、自然に吹けば『ドソドミソド』などの音(倍音)で共鳴するように設計されているため、それらの倍音の振動数に唇が共振し、楽な演奏が可能となるのです。高音の時は上唇の中央部分の狭い範囲が早く振動し、低音の時は上唇の広い範囲がゆっくりと振動します。また、*ff*の時は唇の振幅が大きく、*pp*の時には振幅が小さくなります。

Ⅲ　堂々とした良い音の獲得

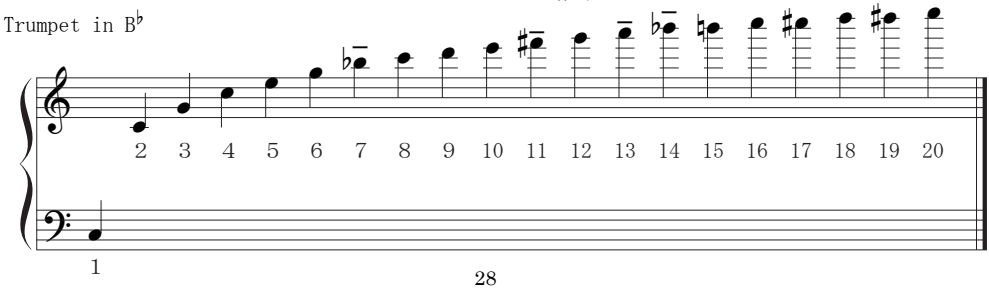
演奏家は、大量の空気を肺の中に吸い込み、その大きく膨らんだ風船のような肺を胴部の筋肉でしっかりと支えることで、肺の中の圧力を一定に保ち、吹奏の準備を整えます。そしてその状態から、腹筋と背筋(特に脇腹に両手を当てた時に親指が当たる場所の筋肉)を更に緊張させ(力を入れるのではありません)、肺や口の中の圧を上昇させます。するとその圧力で上唇が開かれ、そのすき間から空気が漏れ出すと同時に、上唇を閉じる圧力がカップ側から加わり、上唇はその開閉運動を繰り返すのです。

「十分な空気で満たされた肺を、胴部の筋肉で下からしっかりと支えた状態で演奏する。」これが堂々とした音を得るために最も重要なことです。楽団の最も重要な演奏家や、ビッグバンドのリードトランペットを選ぶ際には、常に堂々とした音を出す人が選ばれるものです。

この冊子の読者には、まだ金管楽器を始めたばかりで「倍音」という言葉が余りよく分からないという人もいるでしょうから、少し説明したいと思います。まずは、倍音という言葉に『自然倍音』と『音色を決める倍音』の二通りの意味があるということを知っておきましょう。

ピストンが無い金管楽器でも「ドソドミソド」と吹奏することは可能で、この時の「ド」や「ソ」１つ１つが『自然倍音』と呼ばれます。またこの「ドソドミソド」という並びを『自然倍音列』と言います。

下の譜表を見て下さい。最も低い「ド」が第１倍音(トランペットでは普通は演奏できません)で、第２倍音はその上の「ド」、第３倍音が「ソ」、第４倍音はそのまた上の「ド」、第５倍音が「ミ」……となります。また第１倍音は基音、またはペダルトーンとも呼ばれます。

そして『音色を決める倍音』ですが、例えば、金管楽器でチューニングの「ド」をロングトーンしている際、その「ド」の音の中に、「ド」の振動数と整数倍の振動数を持つ音もいくつか一緒に鳴っているのです。そして、その一緒に鳴っている音の含まれ具合に依り音色が決まります。これが『音色を決める倍音』と呼ばれるもので、この倍音が**ほど良い割合**で含まれると、その楽器らしい良い音に聴こえます。よく『倍音をたくさん含んだ豊かな音色』という言葉がよく使われますが、この表現は適切ではありません。実際、やたらとたくさんの倍音を含んだ音というものは、かなり耳障りなビィーンという音色です。ホルンの特殊奏法であるゲシュトップ音がこれに当たり、逆に全く倍音を含まない音が音叉の音です。つまり、やたらに倍音をたくさん含めばいいのではなく、ほどよく含むのが最良なのです。この「良い音」の習得には、多くの音楽を聴くことによって自分の求める音のイメージを明確にして日々練習するということが重要です。

トランペット自然倍音列